

月刊CDCガイドラインニュース
 CDCガイドラインの最新情報をどよりも早くお届けします！
 編集長／矢野邦夫

10月号

第一七八回
 ヒトパピローマウイルス
 関連がん

CDCはヒトパピローマウイルスワクチンを強く推奨している。それは子宮頸がんのみならず、ほかのがんへの予防も期待できるからである。ここで「ヒトパピローマウイルス関連がん」[http://www.cdc.gov/mmwr/volumes/65/wr/pdfs/mm6526a1.pdf] を紹介する。

「ヒトパピローマウイルスとがん」は子宮頸がんを引き起こすことで知られているが、外陰部、膣、陰茎、口腔咽頭、肛門、直腸のがんも引き起こす。ほとんどのHPV感染は無症状であり、自然に消失するが、13種類の発がん性HPV遺伝子型のうちの1つが持続感染すると、前がん状態もしくはがんに進展しうる。

そのほかの解剖学的部位では扁平上皮がんのみである()による特定の解剖学的部位(子宮頸部、外陰部、膣、陰茎、口腔咽頭、肛門、直腸など)での侵襲性がんとして定義される。口腔咽頭がんには舌根、咽頭扁桃、前・後口蓋弓、舌扁桃溝、軟口蓋および口蓋垂の前面、咽頭の側壁および後壁のがんが含まれる。

HPV関連がんの発生数 2008～2012年、平均38,793件のHPV関連がんが毎年診断され、女性23,000件(59%)および男性15,793件(41%)が含まれている。この数字にHPVの寄与率(79%)を掛けることによって、CDCは約30,700件(女性19,200件、男性11,600件)の新規がんがHPVにより発生していると推定した。30,700件のうち、24,600件がHPV16型および18型によるものであるが、これらは現在のすべてのHPVワクチンに含まれている。そして、28,500件が9価HPV

ワクチンに含まれているハイリスクHPV型によるものである。「ヒトパピローマウイルスワクチン」HPVワクチンは11～12歳での接種が推奨され、もし接種歴がなければ、女性では26歳、男性では21歳までに接種する。

HPVワクチンは子宮頸部およびほかの部位でがんを引き起こすHPV型の感染を防ぐことができる。ワクチンはHPV16型および18型を含んでおり、これらは米国におけるHPV関連がんの全体の63%を引き起こしている。そして、31、33、45、52、58型は追加の10%を引き起こしている。発がん性HPV遺伝子型のなかで、HPV16型が最も持続感染しやすい。がんに進展しやすい。高所得国ではHPVワクチンプログラムの集団レベルでの効果が観察されているが、これにはワクチンタイプの流行および肛門性器疣贅の減少が含まれている。肛門性器疣

贅のほとんどはHPV6型および11型によって引き起こされているが、これらも4価および9価のHPVワクチンの標的となっている。「子宮頸部がんの定期的スクリーニング」ほとんどの子宮頸部がんは21～65歳の女性の前がん状態の定期的スクリーニングおよび異常検査結果のフォローアップにて予防可能である。すなわち、子宮頸がんの前がん状態はスクリーニングにて検出でき、治療によってがんへの進展を防ぐことができる。しかし、そのほかのHPV関連がんに対する効果的な対策型検診(註釈・対象集団全体の死亡率の減少を目的とした検診)は現在まだ存在しない。

プロフィール



やの・くににお
 浜松医療センター
 副院長 兼
 感染症内科長
 「ねころんで読める
 CDCガイドライン
 (メディカ出版)」
 シリーズ等、CDC
 関連の編・訳書多数。

●今月の矢野編集長
 先日、ストレスチェックをした。「ストレスがまったくないことが職場にばれたらどうしよう!」という心配がストレスになっている。